

聖武天皇祭 舞楽

5月2日

東大寺鏡池舞楽台

上演：公益社団法人 なん と がく そ 南都楽所



奈良の大仏さまとして知られる東大寺の盧舎那仏は、奈良時代に聖武天皇の御発願により造立されました。5月2日は聖武天皇の御忌日にあたり、そのご遺徳をしのぶ慶讃法要を大仏殿にて毎年厳修致しております。その法要に向かう僧侶の練り行列の到来にあわせて、鏡池では舞楽が上演されます(雨天時は金鐘ホール)。

解説

1 振鉾 (えんぶ)

舞楽のはじめに必ず奏する曲で、国土安穩、雅音成就を祈って舞台を浄めるために舞われる。鉾を持つ赤袍の左方舞人と、緑袍の右方舞人が笛の乱声にあわせて鉾を振って舞う。

2 迦陵頻 (かりょうびん) = 左舞

奈良時代に林邑(今のベトナム地方)の僧・仏哲が伝えた林邑八楽のひとつといわれる印度系の舞である。説話によると、祇園精舎の供養の日に極楽にいるというめでたい霊鳥・迦陵頻伽が飛んできて舞ったのを妙音天が舞に作ったという。4人の童子が、四季の花をかざした天冠をいただき、鳥の羽を背に、銅拍子を持って舞う可憐な童舞である。

3 胡蝶 (こちょう) = 右舞

延喜6年8月、宇多上皇が童相撲をご覧になるについて、山城守藤原忠房が作曲し、舞は敦実親王によって作られた。迦陵頻と一対として蝶鳥ともいう。4人の童子が背に極彩色を施した大きな蝶の羽根を負い、額に山吹の花をかざした天冠をつけ、手にも山吹の花を持つ。花に遊び戯れる蝶をあらわしてる。奈良の大寺での大法要などの際には迦陵頻とともによく舞われる曲である。これら子供たちが舞うものをとくに「童舞」とよび、被り物は天冠を用いる。

4 蘭陵王 (らんりょうおう) = 左舞

中国・北齊の蘭陵王長恭は美青年であったので、戦場に赴く時はいつも恐ろしい面をつけ軍を指揮したという。それによっておさめた勝利の喜びを舞に表したところ、国土は豊かになり世の中が平和になったという故事に由来すると伝えられている。舞人は龍頭を頭上にし、顎を紐で吊り下げた金色の面をつけ緋房のついた金色の椀ぼちを持ち、雲竜をあしらわした褌襦装束りょうとうをつけて舞う。舞楽の中で最も代表的なものの一つである。

